

「小さな親切」運動本部賞

親子三代、そしてこれからも

香川県 東部中学校 三年
佐藤 紀代

「家の風呂は温まらんのじゃ。」

それが口癖だった祖父は家のお風呂ではなく、近所にある銭湯へ毎日通っていた。真冬でも銭湯に通うため、帰ってくる間に風邪をひかないか、とても心配したことを覚えている。しかし祖父は、ほっかほかの顔をして帰宅後も団扇でパタパタと全身をあおいでいた。

そして数年が経ち、祖父は大好きな銭湯へ通うことができなくなってしまったが、病院のベッドの上でもアツアツのタオルで足を包み込んであげると、いつも目をつむって幸せそうな吐息を漏らしていた。

祖父が亡くなって初めての祖父の誕生日。ふと、銭湯へ行ってみたいとなった。祖父が毎日通っていた銭湯へ、私も行ってみたいとなったのだ。当時の母は乳がんで胸を失っていたため、乳がん専用のバスタイムカバーという水着のような下着をつけて入浴することがあった。

それは温泉専用のものなので、銭湯で使用してもいいかどうか不安そうだったが、そのとき私は、ダメ元で銭湯に聞いてみようかと提案した。銭湯のおばさんは祖父のことを覚えてくれていて、母へも『そんなの気にしなくていいから、堂々と胸張って入っておいで！』と、電話越しに力いっぱい答えてくれた。

その日の夕方、私は祖父が毎日通っていた銭湯の暖簾をくぐった。白い暖簾に赤い「湯」の文字。レトロ感いっぱいだけれど、とても清潔な暖簾をそっとくぐると、カラカラという軽快な音を立てて引き戸が開いた。木枠のしっかりした黒光りするロッカーに荷物を入れてお風呂に入ると、全身から力が抜けるように落ち着いた。初めて来るところなのに、とても不思議な気持ちだった。

ふと隣を見ると、母がお風呂の湯気に隠れて泣いていたが、私は見なかったことにした。そして私も、ぶくぶくと顔の半分までお湯につかってこっそり泣いた。

お風呂から上がると、番台に座っていたおばさんがにこにこしながら、

「おじいちゃんのお風呂、どうだった？」

と聞いてきてくれたけれど、照れくさくてうまく答えることができなかった。顔のほてりは恥ずかしかったからか、のぼせたからかは覚えていない。

銭湯がある場所は、再開発が進んでいる駅前の住宅街の一角にあるが、ここだけは今のまま姿形を変えずに、守り続けられることを願っている。後継者問題や少子高齢化問題などあるが、人情味たっぷりのあの雰囲気はいつまでも残ってほしいし、おばさんの明るい笑顔と心地よい声をもう一度聞きたい。

そして、今ならおばさんにはっきり伝えることができる。

「おばさん、ありがとう。おじいちゃんが毎日来たかった理由がなんとなくわかる。お風呂も人も、みんな温かいって一番の幸せだね」。